

ハンス・ヨーアヒム・ピエヒョッタ：

ファンタジーの原形『千一夜物語』

——真の迷宮と偽の迷宮、あるいは多くの此処と今¹——

梅内幸信・訳

この研究プロジェクトとの関連において私は、『千一夜物語』の童話を、ファンタジーの方法論的準備段階の表れとして規定する。つまり、メタファーと比喩による、この限りでは解明され、理解される発言のレベルでは、内部文化によって認可された現実原則、すなわち現実の伝承された道徳的にして美学的・認識論的支配に反する意識的かつ体系的に企てられた違反、要するに大概のファンタジー文学に対する根本的違反は、なんら見られないということである。これから示そうと思うのは、しかしながら『千一夜物語』におけるファンタジーが、まさしく考え方の異なる「オリエントの」世界を完全に是認する結果生まれたものであるということである（以下参照）。この限りにおいてそのファンタジーは、いずれにしても投影機能——とりわけ——西洋文化圏との対決の成果なのである。『千一夜物語』におけるような考え方が、全般的に統一したものとする想定が許される限りでの話ではあるが、² 2つの対立した考え方がこのように対峙して初めて、オリエントのファンタジー性

¹ 本翻訳の原典は、<Piechotta, Hans Joahim: Vorformen des phantastischen ‘Tausendundeinacht’ —Das wahre und das falsche Labyrinth oder Die vielen Hier und Jetzt —. In: *Phantastik in Literatur und Kunst*. WBG, Darmstadt 1980, S. 111-130.>である。原典は、複雑な箱入り文章であるために、翻訳は困難を極めた。極力分かり易い文章にするために、本来の文を解体したので、誤訳と捉えられかねない箇所も多々あるかも知れない。

² (原注1) これについては、125ページ、また、『千一夜物語』との観点において関連する異質な文化的影響、すなわち『千一夜物語』の物語を参照。1839年のカルカッタ版アラビア語原典に初めて扱った12巻から成る完全版。エンノ・リットマン (Enno Littmann) の翻訳、フランクフルト・アム・マイン、1976年、第12巻、655ページ以下、「千一夜物語成立史」、特に660ページ以下参照。

についての論議も意義深いものとなるかも知れない。方法論的準備段階に限定された対象領域、すなわち投影と対決の影響を強く受けているものは、次の論文であるが、それは、『千一夜物語』というオリエントの文化像の持つ、事実史的、歴史哲学的に解釈されうる原理を作り上げることを超えて、私の考えでは、ファンタジーを内包する西洋の文学作品との「必然的な比較」を試みている。扱われるのは、ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges) の短編『二人の王と二つの迷宮』 (*Die beiden Könige und die beiden Labyrinth*) である。この短編は、軌道から外れた現実モデル、すなわちオリエント文化、とりわけ『千一夜物語』に長年取り組んだ著者 (彼の『千一夜物語』翻訳についてのエッセイを参照)³ の他のテキストにはほとんど見られない長所を持っている。つまり、オリエントの世界的視点の持つ本質的特徴 (有限性、誇張、迷宮等々、参照) をテーマ化し、これを「オリエントの対象規定の超内省的構造」へと移し変えるという長所である。その対象規定の逆説——迷宮による世界メタファーとしての砂漠——は、概念史上の信憑性とオリエントに対抗する方法論上の懸隔の要求、すなわち『千一夜物語』の童話という形で文書化される以前の話の再生とファンタジーによる解釈への要求を満たしている。

これによって予告された、真のファンタジーによる問題提起の減少が避けられなかったために、同時にボルヘスによるばかりではなく、『千一夜物語』においても触れられた形而上学的問題 (神の創造された現実との関係) の放棄、すなわち内容や成立史、受容史⁴ に関して容易に入手される情報並びに、とりわけ学問の歴史における文化に特殊な、概念史上のカテゴリーを、より基礎的なカテゴリーへの転換の放棄が強く勧められたのであった。

おそらく、ファンタジー文学の射程がこの上もなく良く表現されるの

³ (原注2) ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges), 「千一夜物語の童話の翻訳者たち」, ホルヘ・ルイス・ボルヘス『一と多』, 「文学に関するエッセイ」, ミュンヘン, 1966年, 35-62ページ参照。(訳注1) ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges, 1899-1986), アルゼンチンはブエノスアイレス生まれの小説家、詩人。『伝奇集』, 『幻獣辞典』などを書いた。

⁴ (原注3) リットマン, 前掲書, 665ページ以下参照。

は、ジャン・パウルの「世界の建造物から見下ろして、いかなる神も決して……」⁵ 必然的なものとして「解明されているわけではない」という談話における神的実体と、例の眩暈を引き起こすような虚飾概念、つまり突然の恐怖や主観的だと想定される恣意によってまとめ上げられたオリент精神の宇宙、すなわち『千一夜物語』の童話と冒険物語において私たちに知らされているような宇宙とを比較することによってであろう。ここですでに私たちは立ち止り、本来西洋ないし東洋の文化的伝統の双方において、地上の現存在の基盤喪失性、すなわち「ゆれ動くイメージ」や「途方もない偶然」の世界に関する一般的な意識が明確になり、⁶ ——それと同様にやはり、ヘーゲルによって、むしろ不本意ながらオリент文化に帰せられた「確固たるものはなにもなし」⁷ という評価が、ジャン・パウルにおけるキリストの「硬直し、無言のものはなにもなし」⁸ という談話において、単純に（先鋭化されて）繰り返されるだけなのだという論拠を認める羽目となる。従ってこの事態は、次のように仮定しても、依然として変化はない。つまり、同じテーマとモチーフの表面的な現象の背後に本質的な違いが隠されていて、一方的な反省文化における進んだ批評家、すなわち魅力的な夢の表現と蟹気楼の著者であるジャン・パウルが、オリентの陶酔的な領域に対する関心を共に準備し、そうすることによってまさしく再び、一連の西洋のオリент・マニアとして、すなわちベックフォード⁹ の『ヴァテック』、フローベール¹⁰ のオリент日記

⁵ (原注4) ジャン・パウル (Jean Paul) 『花と果物、茨の絵、または貧乏弁護士S. ST. ジーベンケースの結婚生活と死、結婚式』第2冊子、最初の花の絵、作品集、第2巻、ミュンヘン、1971年。(訳注2) ジャン・パウル (Jean Paul, 1763-1825)、ドイツ・古典主義とドイツ・ロマン主義との間に位置する作家。代表作には、『ジーベンケース』(Blumen-, Frucht- und Doenenstücke oder Ehestand, Tod und Hochzeit des Armenadvokaten F. St. Siebenkäs, 1796-97)、『臍白時代』(Flegeljahre, 1804-05)、『美学入門』(Vorschule der Ästhetik, 1804) などがある。

⁶ (原注5) ジャン・パウル、前掲書、274ページ。

⁷ (原注6) G. W. F. ヘーゲル『選集』(全20巻)、第18巻『哲学史講義I』、フランクフルト・アム・マイン、1971年、120ページ。

⁸ (原注7) ジャン・パウル、前掲書、274ページ。

⁹ (訳注3) ベックフォード (William Thomas Beckford, 1760-1844)、イギリスの作家にして政治家。代表作には、ゴシック小説の傑作『ヴァセック』(Vathek, 1786) がある。

¹⁰ (訳注4) フローベール (Gustave Flaubert, 1821-80)、フランスの小説家。代表作には、『ボヴァリー夫人』(Madame Bovary, 1857)、『感情教育』(L'Éducation sentimentale, 1869) などがある。

からボルヘスの迷宮に至るまでの物語に含まれると仮定してもそうなのである。

この2つの問題提起は、とりわけ最後に挙げられ、それぞれの著者ごとに、陶酔と狂気、恍惚、あるいはまた瞑想的な静けさという含意においていっそう詳しく規定される「受容現象オリент」が、この意味において常に、土着である西洋世界の厳格に階級づけられ、カテゴリー化された認識方法への（部分的には文明に悲観的な動機を持つ）批判の表現、つまり普遍性をひたすら主張する合理性と、これらの原理に従って整えられた、抽象的な生活圏への批判の表現であっただけに、いっそう慎重に区別されるべきである。にもかかわらず大切なことは、前者の問題提起を、例えばプラトン¹¹やニーチェ¹²における嘘をつく詩人たちという太古のトポスへの反動、すなわち芸術時代の終わりに出会う、オリент文化の「射影による」場というヘーゲルの言葉への反動と解釈することのみではない。私たちもまた、このことを追究するつもりであるが、しかし、この概念の持つ妥当性の意味を、まずは上述の期待、すなわち歴史過程の中で抑圧され、エキゾチックな遠方に移動させられた欲求とはかかわりなく、その概念の持つ内在的で文化史的な形態を調査することから始めるつもりである。その際、『千一夜物語』から出た物語が討論の中心に移るが、それでもすでに紀元8世紀にインド語からペルシア語へ翻訳され、10世紀にアラビア語へ翻訳されたこの童話集¹³の最初の枠物語が、一種の導入部となり、ここから出発して、オリент文化の典型的な特徴は、

¹¹（訳注5）プラトン（Platon, BC. 427-347）、古代ギリシアの哲学者で、ソクラテスの弟子にして、アリストテレスの師。『ソクラテスの弁明』や『国家』などの著書がある。

¹²（原注8）特に、プラトン『ポリテイア』、第10の書とフリードリヒ・ニーチェ『人間的な、あまりに人間的な』、第4の主要作品『芸術家と作家の魂から』、第1節以下参照。（訳注6）フリードリヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）、ドイツの哲学者。「神は死んだ」という彼の叫びは有名。代表的著作には、『音楽の精神からの悲劇の誕生』（*Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik*, 1872）、『ツアラトゥストラはこう語った』（*Also sprach Zarathustra*, 1883-92）、『権力への意思』（*Der Wille zur Macht*, 1901）などがある。

¹³（原注9）*Alf Laila Wa-Laila*（アラビア語で『千一夜物語』）。インド語からペルシア語へ翻訳された選集 *Hazār afsāna*（千夜）（リットマン、前掲書、Hezār Eesāneh）が、基礎を作った。補充と変更は、18世紀に入るまで認められる。これについてはキントラーの文学事典、ミュンヘン、1974年、第3巻、919-920ページ、さらに前掲書、第24巻（補遺）、10440-10443ページ、リットマン、前掲書、参照。

この時代の宗教的にして、哲学的な見解との啞然とするような類推によって、¹⁴ 容易に規定されうるであろう。つまり、比喩的な意味における300以上のもの童話や長編小説、短編小説、恋愛物語、悪漢小説、船乗り物語、教訓物語、伝説、聖徒伝説、滑稽物語、逸話を含む「語りえないもの」(E. リットマン [Littmann])、「測り知れなく多くのもの」¹⁵ は、実際には、むしろ物語や空想、虚構に乏しい時代の逆説的な成果である。すなわち、本当に無限に「溢れるイメージや夢、願望表現、人物たち、冒険」¹⁶ は、有名な語り手、宰相の娘シェヘラザード (Schehrezâd) の、その有限性において完全に予測可能な寿命を背景にして展開されるのである。「インドと中国の島国における」¹⁷ シャフリヤール (Schehrijâr) 王は、そのようにして女性全体に復讐するために、毎晩別の女性と結婚し、次の朝にはその女性を死刑に処するのだが、その王の妻である彼女は、周知のようにその運命の時を、機略豊かでわくわくするような物語の続きを千回も繰り返し告示することによって先のばしすることに成功し、最終的にこの再三再四魅了される女嫌いの男は、シェヘラザードの命を助けるのである。このように私たちは、この彩り鮮やかに織られた物語世界において命の危険に脅かされている状況、すなわち語りの続行によって展開されるオリエントの世界像をいっそう展望させてくれる格好の状況を見ることができる。というのも、この進展状況において、隷属させられた人間と専制君主の圧倒的な意志との間の典型的な衝突が起こるからである(私たちが女性の代表と家父長的・中世的社會秩序の典型的な代表者の姿を認めるのも偶然ではない)。また、オリエント学者ジャン・アントワヌ・ガラン (Jean Antoine Galland) ¹⁸ によって18世紀初頭に出版された『千一夜物語』の最初の

¹⁴ (原注10) ヘーゲル、選集、前掲書、第12巻『哲学史講義』、第4部、第1章、第2節「イスラム教」428ページ以下、第18巻118ページ以下、並びに第19巻『哲学史講義』、第2部、第1章「アラビア哲学」514ページ以下参照。

¹⁵ (原注11) リットマン、前掲書、664ページ、インゲ・ドレーケン (Inge Dreecken) [編]『時宣月と明けの明星』、「千一夜物語の最もすばらしい物語」、編者の序文、ミュンヘン、1965年、7ページ。

¹⁶ (原注12) 同所。

¹⁷ (原注13) リットマン、前掲書、第1巻「シェリヤール王とその兄」、19ページ。

¹⁸ (原注14) ジャン・アントワヌ・ガラン (1646-1725)、ヨーロッパ初の翻訳、*Les mille et une nuits, contes arabes*、全12巻、1704-17年。

フランス語版以来、感激したヨーロッパ人たちが再三再四活発にし、異常に促進された異国情緒のいくつかは、相対化されて西洋文化の伝統内部における諸々の矛盾へと差し戻されるかも知れない。もっともそれは、1つの中心のカテゴリーが、引用された枠物語においてばかりではなく、個々の童話や後でこれに続く童話においても、「主従関係という恐怖」、あるいはさらに一般化すれば、そのつどより強い権力者の手に委ねられる個人の「無限の意志」（ヘーゲル）によって特徴づけられることを知ったときの話である。

さて、首切り役人は、引き立てようと王女〔イラクの王アブド・アル・カディル'Abd el-Kâdirの娘、王女ハヤフト・アル・ヌフスHayât en-Nufûs：原注〕の背に手を置いた。しかし、そのとき王がその首切り役人に向かって大声で怒鳴り、手に持っていた刀を役人に投げつけたので、首切り役人はほとんど命を失いかけたが、王は怒鳴った。「下郎め、わしが怒ったら、もう寛大さなど期待できんぞ。あいつの髪をわしづかみにし、引きずり、地べたを舐めさせるのじゃ！」首切り役人は、王の命じたままに、王女の髪をつかんで引きずってゆき、王子も同じ目に会わせた。〔……〕そして今度は、若者のもとに行って、剣を抜き、それを若者〔サイフ・アル・アーザム・シャー王の息子、アンダシル王子。翻訳すると「堂々たる剣」の意；原注。〕の頭上で三度回転させた。すると、すべての戦士たちは、こぞって泣き、取り成し役たちが二人を助けにきて欲しいと、アラーに懇願した。しかしその後、役人が腕を振り上げると、突然砂塵が舞い上がり、一同の視界はさえぎられてしまった。

〔……〕一方、例の砂塵が舞い上がったとき、アブド・アル・カディル王は叫んだ。「皆の者、どうしたのじゃ？ 埃のように舞って、われわれの視界をさえぎっているものはなんじゃ？」すると、宰相は飛び上がり、実際その砂塵がどうして生じたものかを突き止めるために、急いで例の砂塵の方へ駆けつけた。そして、宰相は、そこにいるのが、イナゴのように数知れなく群がる兵馬であることに気づいた。その大群は計り知れ

ず、地上のいかなる力もそれには抗しきれず、それらは山や谷を、とりわけ丘という丘を埋め尽くしていた。[……]すると、大臣は下へ降りて行き、天幕の間、騎兵たちや護衛兵たちの間を歩いて行った。実際彼は、夜明けから日没近くまで歩き回らねばならなかったが、ようやくのことで金色に光る剣を持つ家来たちや星飾りのついた天幕へとたどり着いた。その後彼は、太守たちや大臣たち、そして高官たちや侍従たちのところへ足を伸ばした。さらに宰相は、歩み、ついに支配者その人の許にたどり着いた。その人を宰相は、権力を握る王だと悟った。高位高官の者たちは、宰相の姿を目にすると、こう怒鳴った。「頭が高い！ 床に口づけよ！」宰相は、土下座した。にもかかわらず、彼が起き上がろうとすると、彼らは二度、三度と彼に怒鳴った。最後に彼は、頭を上げて、立ち上がった。しかし、そのとき彼は、恐ろしさのあまり床に倒れて長々とはいつくばってしまった。[……]「それがしは聞き、従う！」と大臣は答え、歩みかけた。それでも高位高官の者たちは、再び宰相に叫びかけた。「頭が高い！ 床に口づけよ！」これを宰相は、今や20回もしたであろう。そして、彼の呼吸が鼻を抜けて、死にそうになったとき、彼はようやく再び立ち上がった。それから彼は、王を取り巻く人々を後にし、絶え間なく急いで立ち去り、王の生活やその強大な軍事力にあれこれと考えをめぐらしながら、ついに再びアプド・アル・デル・カディル王の御前にやってきたが、途轍もない怖れで青ざめ、全身が震えていた。(アルダシルとハヤット・アル・ヌフス姫 *Ardaschîr und Hajât en-Nufûs* の物語。719夜話から738夜話まで、75-78ページ。) ¹⁹

自分のしたい放題に振る舞うオリエントの支配者が、そのほとんど経験による無限の大権力にもかかわらず、彼に無条件に従属させられた民衆と同じ制限に固執するのとまったく同様に——というのも、この権力は、まったくの「増大」、すなわち他の人々の権力の強化であり、軍人の数の増大、強大

¹⁹ (原注15) リットマン、前掲書、第9巻。

な軍隊等々の強化であるから——，²⁰ イメージや人物たち，冒険のすばらしい豊かさもまた，自らの有限意識によってファンタスティックな競争へと駆り立てられるが，それでいて，なおも法外な現象の偶然による収集として見えてくる。つまり，「誇張」と「誇大」は，第二のカテゴリーであって，これを私たちは，西洋文化のあらゆるセンセーションを抽象して，1つの文化像の原理として君主の恐怖という社会的に搾取されうるカテゴリー，すなわち中世的専制君主制から派生させたのである。他でもなくこの関連において，船乗りシンドバッドのような者が出会う巨大な海の怪物と磁石の山は一致する。彼が出会うのは，むしろ上述したオリエントの王の山や谷を埋め尽くす例の途方もない軍隊や脅威を与える際限のない権力支配であるが，これは美学上の感覚的な潜在抵抗能力であって，これを私たちは，十分な合理性批判ないし啓蒙批判を通じ，一般に詩的作品に認めることを常としている。

しかし，私がいっそう目をこらして探してみますと，島にある大きな白い物体が目にとまりました。ただちに私は，木から降り，そちらへ向かいました。ひたすらまっすぐ進みますと，やがてそこにたどり着きました。するとなんと，それは白い大伽藍で，空高くそびえ立つ，幅広の建物でした。[……] そのあとで私は，私が立っていた場所に印を付け，その周りを測ろうと思いましたので，その大伽藍の周りをくまなく一周しました。すると，その大伽藍は，丸々50歩あることが分かりました。さて，私がその中へ入ろうとして，その方法を思案していますと，日がすでに傾きかけたものですから，太陽が地平線に近づき，太陽がすっかり姿を隠し，天が暗くなってしまいました。そして，私には太陽がもはやまったく目に入りませんでしたので，私は雲がおそらく太陽をさえぎったのだと思いました。私は空を見上げ，目をこらしてその彼方を眺めやりました。そこに私が見たものは，なんとしたことでしょう，巨大

²⁰ (原注16) ヘーゲル，選集，前掲書，第18巻，118ページ。「人間は，自身恐怖の中にあるか，あるいは他人を恐怖によって支配する。両者は，一つの段階にある。その違いは，すべて有限なものを一つの特種な目的のために犠牲にできるかどうかの，かなり強い意志力のみである。」

な姿の鳥で、それは途方もなく大きく、羽を広々と広げて、空中を飛んでおりました。太陽をおおい隠し、その光を鳥からさえぎっていたのは、その鳥だったのです。今や、私の驚きは、さらにいっそう大きくなりました。〔……〕私が、鳥の上に認めた鳥を、ますます大きな驚きを持って眺めていますと、以前巡礼者や旅人たちが私に語ってくれていたひとつの物語を私は思い出しました。つまり、ある島にルフと呼ばれる巨大な鳥が住んでいて、その鳥は雛鳥の口に象を餌として与えるというのです。そこで私は、私を見た例の丸屋根がルフ鳥の卵であるに違いないことを確信したのです。私は、崇高なるアラーの神の御業に驚嘆してしまいました。〔……〕

〔……〕そこで私は、その鳥に結び付けていたターバンをほどいて、その足から身を振りほどきましたが、恐怖のあまり震え、立ち上がって、そこから駆け出しました。しかし、すぐそののち鳥は、その爪でなにかを地面から拾い上げ、それをつかんで天の雲に向かって飛んで行きました。私が目をこらしてその行方を眺めていますと、その鳥が拾い上げて、空中にもち上げたのが途方もなく長くて、巨大な体の蛇であることに気づきました。それを見て、私は恐怖に満たされたのです。〔……〕それでも私は気を取り戻して、例の谷へ行きますと、その谷底がすべてダイヤモンドにおおわれているのを見たのです。〔……〕（船乗りシンドバッドの物語。船乗りシンドバッドの第2の旅。540番目の夜話から544番目の夜話まで、117-120ページ。）²¹

感覚的なものや把握しがたいもの一般、芸術ないし文芸は、とりわけ西洋の思想的伝統の内部で反対の立場を取るが、その考えはこの上もなく緻密に表現される。この反対の立場において、あらゆる現実を支配する悟性的文化の、一見無限と見える領域への抗議、すなわち抽象性と普遍性が理論上ならびに実践上強力に介入することへの抗議が問題となるとすれば、私たちはこ

²¹（原注17）リットマン、前掲書、第7巻。

ここで、有限な個体と、もう1つ別の、驚嘆すべきではあるが、それでいて同様に個性的なものとの対決を目撃することとなる。が、この対決は、「同一の」レベルで起こるゆえに、むしろ問題とならないものである。あらゆる尺度を破壊するその特別な大きさと強力さは、それにもかかわらず、それらが当該の人間の自己理解、すなわち世界理解にも（自然哲学的説明への2、3の出発点にはなるものの）、しかしまた「両者の関係」の理解にも役立たないので、外面的な影響を及ぼすことは珍しい。そのため、上述した抜粋によるテキストの文法も、「時間的継承」と、とりわけ「空間的拡張」の枠内で維持されるのである。つまり、「私が……のとき」、「まったく突然に」（1-9行目等々）、ないしは「ものすごく大きな」、「……そびえ立った大きな白い丸屋根が」、「丸々50歩の……」、「巨大な姿の、途方もなく大きな体の鳥が……」（1-5行目。13・14行目等々）と語られる。しかし、ある種の有限的なものの広がりを持つ主観的な恣意、舞台の拡大、同時に突発的出来事の時間的な列挙、エピソード、恐怖、自然の豊かさ、権力——こういったものは、「童話」や「冒険物語のジャンル」²²にとって特徴的なものであって、その近くに『千一夜物語』の誇張とファンタジーが見られるであろう。それは、前々からありきたりのもので、精力的な「凌駕」という観点においてであれ、やはり対象世界の相対化された承認であるように見える。冒険者のタイプにとって、目的とか目標はなく、旅立ちという一面的なモチーフが重要であるように、こう語られる。

今私が送っている快適な生活にあって、やがては乗り越えた危険への思い出の色が褪せてしまった。そのうち私は〔……〕なにもしないこととうんざりし、新たな危険に向かうことを選んだのだった……。²³

²²（原注18）とりわけ、マックス・リュティ『ヨーロッパの民俗童話——形態と本質』、ベルン、1947年、37ページ以下参照。また、パウル・ゲオルク・ノイマイヤー（Paul Georg Neumair）『近代ドイツ文学における冒険のタイプ』、学位論文、フランクフルト・アム・マイン、1933年。（訳注7）マックス・リュティ（Max Lüthi, 1909-91）、スイスはベルン出身のヨーロッパ民間伝承文学に関する学者。代表的な研究書に、『ヨーロッパの昔話——その形式と本質』（*Das europäische Volksmärchen*, 1947）、『昔話と伝説』（*Volksmärchen und Volkssage*, 1961）などがある。

²³（原注19）ドレーケン、前掲書、479ページ。

このようにこの冒険物語もまた、旅の特殊なテーマとか旅行者のモチーフとは関係なく(シンドバッドの場合、「お金を稼ぎ、もうけるための」²⁴ だが)、この物語が外部に留まっている語りの要因——危険や山、大洋、未発見の大陸、等々——を、まさしく新しいものや違ったもの、突然現れるものとの魅力的な関係、すなわち他でもない個体の意識との確かな関係において示すことができるという点においてこの物語は、完全に拘束力のないままなのである。つまり、こうして色とりどりのイメージが、ほとんど無関係に、ほぼ相違なく思い返されることによって、たとえ「自然な」関連において事物や人間が疎外されていようとも、すべてのイメージは、人をびっくりさせるようなテーゼとなるように思われる。これは、確かに一方では有限なる意志という、冒頭で述べたカテゴリーを補うものではあるが、しかし他方で、その矛盾は明らかであろう。というのも反対に、『千一夜物語』中の互いに駆り立てる登場人物たちやモチーフ、そして物語を、非常に人工的だと見なさない人はいないと思われるからである。

にもかかわらず、まったく異なる解釈の水準にある諸々の概念——人物たちやモチーフ、物語——によってすでに、とはいえ私たちによって仮定された「自然——人工」という逆説の取扱いにあって、さらなる論証上の区別が不可避となってくる。従って、多くの物語において基礎的社会関係に容易に帰属し、実際これらの関係から直線的に導き出される「背景の事件」を、最初に指摘するだけで事は済まない。つまりそれは、変装したカリフや靴直し、40人の盗賊を殺す女奴隷、漁師、ビンの中の精霊が同じレベルで行き交うような文学なのである。この文学は、もっと厳密に言う、個体とは、実際自分に、例えばカースト制度において制定されている社会的制限や階級の違いを、「自然なもの」として理解しなければならないような文学なのである。これは、私たちがファンタジーの第一のカテゴリーと規定しようとしたものに対応している。——しかも同時に、この経験的要因に対して、個体の本来的同等性に関する論拠(2人のシンドバッドのモチーフ。神ないし創造の起源

²⁴ (原注20) リットマン、前掲書、「船乗りシンドバッドの第3の旅」、546番目の夜話、127ページ。

からくる同等性、「そして私はそこにいる者と同等で、彼は私と同等である……」、以下参照、121ページ、7行目）と、彼らの身の上に降りかかる厳しい運命の、まさしくその恣意性から導き出される「完全な幸運の交替」の可能性が反論として出されるであろう。

私に知らされているところでは、敬虔な支配者であるハルン・アル・ラシッド教主 (Kalif) の時代に、首都バクダットに軽子シンドバッドと呼ばれる一人の男が住んでおりました。彼は貧しい男で、賃金を稼ぐために荷物を頭に乘せて運んでおりました。さて、ある日彼が重い荷物を運んでいたとき、荷物の重みであわやくずれかけたことがありました。といいますのも、その日はとても暑い日だったからです。そのとき彼は、ある商人の家の傍を通りかかりましたが、その通りは掃除され、水が撒かれておりました。そこの空気はひんやりとし、家の戸の傍には幅広い長椅子が置いてありました。軽子は、その椅子の上に荷物を置き、休憩して呼吸を整えました。〔……〕すると、そのとき中から琴とリュートの響きが聞こえてきました。加えて聞こえてきた歌声が魅惑し、ありとあらゆる旋律が恍惚とさせました。〔……〕驚いて〔……〕彼は近づいて見ると、家の中に大きな庭が一つあることに気づきました。そして、その中に彼は、従僕や奴隷たち、宦官や召使いたち、そして王やスルタンの所にしか見ないような物を見つけました。それからおいしそうで薬味のきいたありとあらゆる料理の香りとすばらしいワインの香りが軽子の方へと流れてきました。そこで軽子は、天を仰いで、こう言いました。「創造主に称えられてあれ、お布施をなさる方よ、貴方は、計算もせずにお布施をなさるのですから！〔……〕貴方は自分の家人のために、自分の欲するもの、そして貴方が家人にあらかじめ定めたものをお決めになったのです。歌人のある者たちは苦勞が多く、他の者たちは休息していません。ある者たちは幸せに暮らし、他の者たちは、私のように辛苦をなめておりました。」それから彼は、次の詩を口ずさみました。

なんと多くの者たちが苦しみ、休息できず、
幸運の影のかけらも見かけぬことよ！
私は、募り行く苦悩の中で暮らし、
実際、嫌なことに私の人生の荷は、とても重い！
もう一人の者は幸せで、苦勞を知らず、
私を重荷が苦しめるような、運命の重荷を彼は知らない。
その者には常に幸せな人生が開け、
歓びと華やかさの中で彼は贅沢に飲み食いする。
精液の雫からあらゆる創造物は生まれたのに、
それに私はその者と似て、その者は私に似ている。
にもかかわらず、私たちの間には雲泥の差があらん、
ワインと酢を比べるときのような。
それでも、主よ、私はたてつく従僕ではありませぬ、
なぜというに、主は、賢く、正しく治めるのですから！
(船乗りシンドバッド。536夜話から537夜話、97-99ページ)²⁵

あらゆる状況の硬直性と「可動性」というアイデンティティーは、千一夜物語の無数の描写において模範的に描かれる。

そして、海上を航海していると、私たちは、ある日とある島にやってきましたが、その島はとてもきれいで、楽園にも似ていました。船長は、そこで私たちと共に留まりました。そして、彼は錨を下ろし、上陸の看板を立て、船の上にいる者は全員、島に上陸しました。そこに竈を据えた後に彼らは、竈に火をおこし、あらゆる種類の仕事を果たしました。[……] 私は、島をあちこち巡る人々の中に入りました。そうして、旅人たちが全員、飲み食いし、気晴らしや遊びに集っていると、突然船の甲板にいた船長が、予期せぬ私たちに大声で叫びかけました。「おま

²⁵ (原注21) リットマン、前掲書。

えたち、命を守れ！ 逃げろ、甲板に上がれ、急いでくるんだ！ 持ち物は捨ておけ！〔……〕おまえたちがいるその島は、島ではない。それは大きな魚で、海の真ん中に止まっているだけだ。砂がその上に堆積して、今や島のように見えているだけだ。木が島に生えてしまったのだ。おまえたちが島で火をおこしたとき、熱さに気づいて、動き出したのだ。今すぐにも魚は、おまえたちもろとも海の底に沈んで、全員溺れ死んでしまうぞ。身を守れ、死がおまえたちに襲いかかる前にな！」

(シンドバッドの冒険。最初の旅。538番目の夜話，103-104ページ。)²⁶

海に浮かぶ怪物(リヴァイアサン)²⁷という古いオリエントのモチーフ群に補われ、『千一夜物語』の大きなテーマがここで明らかになる。つまり、現実の(内的)基盤喪失である。対象世界、すなわち動かされる危険な運動体における一見固定されたかのような点として、人間の諸々の欲求の目標を提示する(「楽園」, 上記参照)ものの非物質化は、上記引用に述べられた格好の状況によって追跡されうる。一連の暫定的な世界状況が描写され、その中で1つの存在(ここでは島)が、つまり生命をもち、液化し、解体する要因が、怪物の姿をした「基盤のない」現実が消滅して混沌となり、「次には」新たな、にもかかわらず同じように危険に曝され、没落へと定められた存在(というのも、「好都合な風と波」が、シンドバッドを「高い山のある島の麓へ」、²⁸つまり新たな冒険に向けて連れて行くのであるから)が相互に交代して現れるのである。

実際、現実に関する、あらゆる「意義深い」試行的考えばかりでなく、意

²⁶ (原注22) 同所。

²⁷ (原注23) とりわけ、旧約聖書、ヨブ記、3、8：25以下参照。(怪物リヴァイアサンの描写)「香油鍋のように海は泡立てられ、／背後でそれは、竜骨を輝かす。／潮は銀髪と見紛うばかり……／地上に似る姿なし。／恐怖を知らぬ生物なり！／最強のものたちをも侮蔑の眼差しで見下ろす。／それ、最も誇らしげな王ぞ。」さらに、イザヤ記、27、1、讚美歌74、14、また、特に讚美歌104、25、参照。引用は、旧約聖書、P. Dr. Eugen Henne 訳・解説、I・II巻、パーダーボルン¹⁵ 1952年、参照。そして、『千一夜物語』、リットマン、前掲書、「船乗りシンドバッドの第7の旅」188ページ以下、特に190-191ページ参照。

²⁸ (原注24) リットマン、前掲書、「船乗りシンドバッドの最初の旅」、538番目の夜話、105ページ参照。

義深さをめざす解釈の試みから成る、この暫定的破局という終局から見れば——それというのも、その結果、この『千一夜物語』において何度も示された「空しさ」の認識は、同時にその前提、つまり解釈されるべきこのテキストにおける（まったく説明のつかない）存在全般を破棄せざるをえなくなるからであるが——、やはりオリент文化、例えば「自然の——人工の」という逆説のようなもの、すなわちその文化の少なからぬ複合体は、概念上単純化されうるのである。従って、一方で『千一夜物語』における見せかけの「虚無主義」が私たちによって主張されている自然のものと人工のもの、硬直性と可動性との一体化を説明し、また他方では、有限の意志や専制君主による社会的抑圧や社会的不平等、誇張による語りの原理を仲介する論拠が「なんら確固たるものはない」という立場を超える限りにおいて、私たちは完全に議論の中心に留まっているのである。まず第一に私たちは、ここでもまた西洋的概念区分の消滅と思想による階級化の解体が、オリентに対する関心の動機であることに気づく。例えば、歴史的にはいくぶん早く喚起された南海やタヒチ島等々²⁹ に対する関心が、とりわけそこに未だ無傷のままの本来的自由や平等、友愛という意味において、明確に有用であったとすれば、哲学史において確認されうる、ますます厳格になる自己反省という過程は、理論的ないし認識論的前提をオリентの観点から問題提起するという点においても継続されているのである。さて、規範によって固定され、文化的形成物に関する注釈者たちの自己理解同様、それら形成物の存在にとって重要な、これらの定理に数えられるのは、「自然のもの」や「人工のもの」という概念であり、もっと適切に言うと、それらの概念の間に置かれる相違である。つまり、この相違は、少なくとも200年間、文化内部における秩序づけと、同時に方向づけの表現であった。この相違はまた、西洋思想の偉大な代表者たち、すなわちプラトンの『ポリテイア』における詩人たちに対する追放の判決から、ニーチェの「……すべて詩人の族は、嘘をつくことが大変好きなように

²⁹ (原注25)U. ヤップ(U. Japp)『啓蒙されたヨーロッパと自然な南海』。ゲオルク・フォルスター(Georg Forster)の『世界周航旅行』、H. J. ビエヒョッタ(編)他、『旅とユートピア——後期啓蒙主義の文学について』、フランクフルト・アム・マイン、1976年、10ページ以下参照。

……」³⁰に至るまでの尺度によって、模倣という「自然衝動」に従う作品が、つまり「起こるに違いないであろう蓋然的なもの」³¹が、単なる虚構の疑わしい産物よりも優先されるという限りでは、階級制となり、また方向づけともなる。ここでアリストテレスの詩学から引用された美学上の個別的規定とは無関係に、その「模倣の原理」は、描写の対象を、人工的ファンタジーの干渉から守られた「自然のもの」にしておくのである。あるがままの（人工的なものを加味しない、「曇ったものは真実ではない」〔プラトン〕³²）、ないし真実であるものの客観的な模造に、理性に対する文学の義務と、それによって促進されるべき最適の公共団体が対応している。そのような「理性の帝国主義」（デリダ）³³と書物を「理性的現実」によって方向づけるという要求に反対する批判の試みには事細かく立ち入りはしないが、しかしそれでも現代文学において指摘されることは、遅くともマラルメやフローベール以降の現代文学が、高度に人工的で、ほとんど密封された討論の産物であるがために、写実と模倣による指示作用が距離を置くという実効のある思潮が見られる。さて当然のことながら、文学のそのような排斥傾向の背後に著者たちや、これに関連して同様の論究をする理論家たちの、疑問も抱かずに前提され、疑問の無い真実によって同定される「自然」、すなわち自然な現実等々に対する「不信感」が想定されたのであった。私たちには、『千一夜物語』がこの不信感を与えるという仮説を提出する理由がある。たとえ、細部において議論の余地があろうとも、「自然の」要因を概念上固定する試みがなされたのである。それでもやはり、ホーフマンスタールが『千一夜物語』に対するその有

³⁰（原注26）ニーチェ、前掲書、154章、540ページ。フリードリヒ・ニーチェ『選集』、K. シュレヒタ（Schlechta）編、フランクフルト・アム・マイン、ベルリン、ウィーン、1973年。

³¹（原注27）アリストテレスからの引用。カール・フォアレンダー（Karl Vorländer）『哲学史 I—古代の哲学、古代の芸術論』、ミュンヘン、²1964年、131ページ。

³²（原注28）プラトン『全集』、第3巻、発行地の記載なし、1961年、『ポリテイア』、同所、第2章、289ページ。

³³（原注29）ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』、フランクフルト・アム・マイン、1974年、12ページ。

名な論文³⁴で記しているような「不思議な語りの織物」を観察すれば、その中で少なくとも部分的には自然なもの、すなわち似非合理的現実の模倣による再現という規範的詩学は廃止されたということが判明する。実際、それによって私たちは、新たに上記の「自然の」と「人工の」という概念の同一性に、すなわち双方とも相互の前提関係という形で『千一夜物語』の「ファンタスティックな」世界を構成する概念の同一性にアプローチする。ホーフマンスタールのさらなる発言、つまりこれらの童話の中の1つにおける一般的叙述の最初の語義は、「それが卑俗であったところで〔……〕その卑俗さを失い」、私たちはさらに、「……しばしば〔……〕受容の感情を抱きながら、その語義が感性化するものと、その背後にあって私たちを電光石火のごとく、偉大なものや崇高なものへと導く、より高次なものとの間で判断保留の」³⁵ ままであるために、この逆説は、さらにいっそう首尾よく解決されるのである。「卑俗なものや感性化されたもの」、あるいはまさしく例の最初の語義における「自然なもの」は、ファンタジーの1つのカテゴリー（恐怖、有限の意志）として、しかも完全に事実の歴史によって社会的に解釈されうるものとして妥当性を持つかも知れない。しかしその規定は、ジャンル規定の1つにすぎないものとして、もしミメシス——すなわち、問題となる自然主義の根本原理との関連において引用される、オリент童話のオリントの「現実」による明らかな方向づけ——が、まったく不可能であるということが明白になれば、限定的に誇張とファンタジーによって特徴づけられる規定より二次的なものとならざるをえない。なんといっても、芸術ないし文学から要求される、自然とおぼしき客観性へのアプローチが、確固たる不動の目的を、すなわち「同一の対象領域」を前提としているのである。それゆえ、その対象領域の崩

³⁴ (原注30) フーゴ・フォン・ホーフマンスタール『分冊版全集、散文Ⅲ』、フランクフルト・アム・メイン、²1951年、『千一夜物語』、272ページ。リットマンにおいても、前掲書、第1巻、序論、9ページ。

³⁵ (原注31) フーゴ・フォン・ホーフマンスタール、前掲書、273-274ページ。また、リットマン、前掲書、10-11ページ。(訳注8) フーゴ・フォン・ホーフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929)、オーストリアの詩人。代表作には、歌劇『バラの騎士』(*Der Rosenkavalier*, 1811)、『イエーダーマン』(*Jedermann*, 1811)、『痴人と死』(*Der Tor und der Tod*, 1893) などがある。

壊はやはり、そのつど自ら度を越す幻影から成る不安定な構成を持っているにせよ、またシンドバッド物語やその他の物語で知られている永続的な幸運の交代、はたまたすべてを消耗させる不信感というモチーフを持っているにせよ、『千一夜物語』における主要テーマとなっている。ここで描写されている世界は、その解答を見つければ、純然たる暗号として、賢者に明かされ、内省の苦勞によって見出される現実の静かなイメージが現れてくるような謎を意味してはいない。それゆえ、模倣による文学的プログラムの要求もまた問題となるが、このプログラムを実現するには、それ自体に忠実であり続ける対象世界が肯定的な基盤を持つことが求められるであろう。そして、あたかも疑問の余地のない極端さ、これによって一見一貫していると見える存在と対象領域が、異質で突然の生活状況や不安定個別現象へと変貌する様子が示される。それは、まるで最後にはそのことに関する意識——宿命論だが！——が、もはや厳密な意味における「対象」について語ることをまったく認めないかのようなのである。

「さて、これでわしやおまえのような人間に何が起こりうるかが分かるだろう。この世界は単なる錯覚で、人間はどんな姿でも取る一つの化身なのだ。」（せむしの物語。ユダヤの医者のお話、2860ページ。）³⁶

まさしくオリエント文化に見出された諸規定の抽象性、すなわち明白な概念の消滅、仮象の対象性の非物質化、受動的個性（上記参照）、人間存在の非一貫性は、今や同じように、「私たちには」豊かな具体性の印、つまりいわば西洋の歴史に登場した存在上の欠陥を埋め合わせるもののように見える。この埋め合わせが、交代や変化、人を魅了するもの、官能性の欠如として述べられるとすれば、それは単に、このテーマで生じた感動を現代西洋文学における数多くの改作の試みに言及するためだけのものではない。この方法論上かなり意識的な観点から、オリエントの世界像の持つ例の一目瞭然なパラフ

³⁶（原注32）ドレーケン、前掲書。

レーズが明確に規定される。その際に上記の、地上的現存在の基盤喪失という中心的テーマを巡る個々の規定が要約され、そして別の、ことのほか「ファンタスティックな」判断へと移行される。つまり、『千一夜物語』において描写される現実の虚無主義的解釈が誇張されているように見え（123ページ参照）、しかし同時に、崩壊する客観性の確認から出てくる、オリентにおける主体の受動性、つまり原則的には見解を異にするものの、その運命の無限で、脅威を与える貪欲さに洪々同意する個体の自律性における欠損、あるいは欠陥が認められたことによって、この世界理解の具象的な性格づけにおいては、「迷宮」という考えがいやおうなく浮上してくるのである。

さてしかし、私たちはギリシアの伝説群から出ているこの概念を知っているし、しかも初期西洋文化の関連、すなわちその創設者の発明心（ダイダロスに従う1つのバージョン）において、とりわけまたここでは、例えばオデュッセイアにおけるように、かつて神話において美化された自然の出来事と距離を置いたり、改訂したりするという応用可能なモチーフ（具体的には、迷宮に呪縛されたミノタウロス³⁷の姿）においてその概念を知っている。それゆえ私たちは、この有名な人物の『千一夜物語』への応用に、すなわち真のオリент文化に近づこうとして、冒頭で提出された要求に満足するどころか、再びオリентの問題群で満足するところに留まっているかのように見えるかも知れない。事実、迷宮という「建造物」は、誇張され、見通し難いほどまで多くの主観的要因³⁸——幾何学やパースペクティヴ、次元の支配等々——を含んでいる。これと並んで、極端に複雑な、再三再四それ自体の

³⁷ (訳注9) ミノタウロス (ミーノータウロス; Minotaurus), ギリシア神話に登場する牛頭人身の怪物。クレタ島のミーノース王の妃パーシパエーの子。ミーノース王は、ダイダロスに命じて「迷宮」(ラビュリントス)を建造させ、そこにミノタウロスを閉じ込めた。その食料として9年ごとに7人の少年と7人の少女を生贄に捧げた。3度目の生贄に英雄テーセウスが紛れ込み、ミノタウロスを倒し、ミーノース王の王女アリアドネーからもらった糸玉の助けによって迷宮から脱することができた。

³⁸ (原注33) ここでは特に、ラース・グスタフソンの『ユートピア』において「不可侵性」をファンタジーのカテゴリとして描写している点を参照。エッセイ集『文学におけるファンタジーについて』, ミュンヘン, 1973年, 9-26ページ参照。(訳注10) ラース・グスタフソン (Lars Gustavsson, 1936-), スウェーデン生まれの詩人・小説家・学者。

中へ戻る空間の克服という考え（内的複合性）が含まれているが、これは特性に、とりわけ冒険物語のジャンルにあまりにも頻繁に適応させられたオリエントの童話の「外的にして」、エピソードによる語りの原則に矛盾している。つまり、これは「^{にせ}偽の」迷宮となるであろう。

明らかに、それ自体を意識した内面性、あるいは「内界」³⁹ という問題提起としての「古典的」文言における迷宮という構想がある。これに対する、西洋文学において頻繁に出会う共感、理性ないし西洋史における反省文化の優位を批判する態度から説明されるところの、オリエント文化の不相応に過剰な定義を意味していた。そして、この批判的要因ばかりではなく、「オリエントの観点」へのアプローチの保持を、おそらく最も説得力を持ってその迷宮のような物語において敢えて試みたのが、アルゼンチンの作家ボルヘスであった。『二人の王と二つの迷宮』という有名な物語におけるように、このモチーフは、一般的には第一に、理性の完全性と人類史の直線的に上昇する、必然的な進歩の主張といった近代的思想の伝統が持つ決定的な仮定に対する認識論的、かつまた歴史哲学的に具体化される不信を擁護している。そして、その人類史は、まさしく無意味な通路や袋小路から成る迷路による連想において、またすでに克服されたと信じられていた道程の諸段階から帰還する際に問題視されるのである。

信ずるにたる者たちから語られているのですが、（むろんアラは、もっと多くのことをご存じです）大昔にバビロンの島国に一人の王さまがおられました、この王さまは、建築家たちと魔術師たちを自分の周りに集めて、この者たちに、やっかいで込み入った迷宮を、この上もなく賢い者たちでさえ敢えて入ろうとせず、また入るような者も、迷子に

³⁹（原注34）ラース・グスタフソン、前掲書、12ページ（ピラネージの「監獄」の叙述における）。私たちは、他にもない「その内部」を許容するトポス上の空間にいたので、その内部にいたのである。これが、その本質である。諸々の空間は、なにかしら「迷宮のようなもの」、なにかを閉じ込めるものである。ピラネージの世界は、[……]内面世界である（強調は筆者）。（訳注11）ジョヴァンニ・パティスタ・ピラネージ（Giovanni Battista Piranesi, 1720-78）、イタリアの画家にして建築家。版画集として『ローマの古代遺跡』、『ローマの景観』、『牢獄』などがある。

なってしまうような迷宮を作ることを頼んだのでした。(100ページ)⁴⁰

この最初の命題の曖昧さは、不思議なものと同境を接する完成された自然支配という思想、また太古のオリエントにおける(旧約聖書の)不遜(バビロン!)というモチーフの思想を同時に強調するところから明白になる。というのも、これら2つの思想は、不合理なものへと急変する合理的理論と実践という2つの要因に対して、いわば迷宮の「虚偽性」を、おそらく明確にするが、同時にそれでもなお批判的な二者択一を不可欠なものにする。この二者択一は、「アラブ人の王」という姿と「オリエントの迷宮」という形で現れる。そして、この迷宮は、西洋の諸原則とその倒錯をすでに太古において先取りしているバビロン人に、最初の人工的迷宮によって示された主体の変化、すなわち自然に関して企てられた独自の理性支配の対象への変化に対する解答と補足として出されるのである。

この行為は、腹立ちが基でした。といたしますのも、紛糾と奇蹟は、神に委ねられた行為であります。しかし、人間の行為ではありません。時が流れ、彼の宮廷にアラブ人の王がやってきました。バビロンの王は、(客の無知を嘲笑するために)その客を迷宮に入れさせましたが、そこでその客は、驚き混乱し、日没まであちこちさまよいました。そこで彼は、神の援助を求め、戸口を発見しました。客の口から嘆きの声はもれませんでした。それでも彼は、バビロンの王に向かって言いました。「私はアラビアにもっとすばらしい迷宮を持っておりますので、神のご意志に叶うならば、いつの日かそれをご覧にいれましょう。」そうして彼は、アラビアに戻り、自分の隊長や首長たちを集め、バビロンの国々を、強運の星の下で廃墟にしましたので、彼らの要塞を取り壊し、人々を疲労困憊させ、バビロンの王その人を捕虜にしました。王は、彼を足の速いラクダの上に縛りつけ、彼を砂漠へ連れ出しました。彼らは、三日間ラ

⁴⁰ (原注35) ホルヘ・ルイス・ボルヘス『全集』、ミュンヘン、1970年。

クダで進み、そこでアラビアの王は、バビロンの王に言いました。「ああ、時と永遠の王よ、汝、時代の化身よ！ バビロンで汝は、わしを青銅からできた、たくさんの階段や戸口、壁のある迷宮の中で破滅させようとした。今度は、全能の方の思し召しで、わしは汝に上る階段もなく、閉める戸口もなく、歩き回って疲れる通路もない迷宮を見せよう。そこには汝の道を惑わせる壁もないぞ。」

こう言ってアラビア人の王は、バビロンの王の足かせを解いて、砂漠のど真ん中に放り出しました。ここでバビロンの王は、喉の渇きと飢えで死にました。死なない者こそ称えられてあれ。(同所。)

一貫して今後、「本当の」迷宮砂漠という哲学的構想は、オリエントのファンタジーの持つ詩的カテゴリーの尺度に従って摸作されるような、オリエント世界理解の重要部分を成す。ここで、ファンタジー芸術に従属させられる最初の前成された誇張の原理——これは、それでなくとも人間の発明心の境界にある偽りの迷宮を凌駕する点において、「より良い物（迷宮）」（7行目）によって維持されているが——は、大きな遠隔と道程を単純に強調することによって到達される、付加的エピソードの描写と結び付く。オリエントの語り方の検証によってここでテーマ化された迷宮という建築物間にある相違は、さらにいっそう先鋭化される。今や挿入要素という形で置かれる、有限なるものへの「単なる拡張」ないし積み重ねは、「内的な」複合性（上記参照）によって際立たせられた西洋の、反省による文化の意識的撤回を意味している。偽りの「ブロンズ製の迷宮」において包含されるこの伝統とそれに内在する「対象構成の要求」に対抗してボルヘスは、（一時的には、たやすく証明されうる）「自然対象」⁴¹ すなわち流れゆく砂漠の無数の点から成る無限の、ゆらめくゾーンという形姿に強くこだわる。この形姿に当たるのは、普遍的な、空間的「にして」時間的な不一致の意識、すなわち活発な感覚デー

⁴¹（原注36）私のエッセイ『オリエントの迷宮の存在論的にして認識論的基礎づけ』、『クヴァルバー・メルケール』（*Quarber Merkur*）、第48号、プラーマーハーフェン、1978年、37-48ページ参照。

タから寄せ集められた、致命的な「多くの『ここ』や『いま』のカオス」としての意識である。その単純で豊かな知覚，すなわち無限に単調で、「かつ」無限に多様な（従って、迷宮のような）想念世界へ意図的に還元される状況を、すでに『千一夜物語』において出会う，幸運の交代ないしその都度予期せぬ生活状況と対決させられるオリエント的個体の持つ諸々のモチーフが予告していたのである。

いっそう一般的に表現すれば，西洋の主体の自律に関する態度への二重の批判は，一方では実際すでに迷宮の考えの古典的公式の中に述べられている。というのも，その考えは，最終段階において，人間による人間支配における自然支配の変遷を述べているからである。しかし，他方でより急進的に述べられるのは，「啓蒙の弁証法」に比べられるそのような転換の他に，「偽りの」迷宮に譲歩して，ともかくも容認される特質が，破局によって消極的に（ex negativo）挑発された意義深い自己反省——従ってこれは，むろん人間的なものに留まったのであったが——，この自己反省のために，もう一度否定される点である。それゆえ，やはり自己意識——これは，自分自身を「認識の敷居を越え出る」反省の積極の対象としうるものであるが（ヘーゲル）——その自己意識の持つ理論と実践を基礎づける命題に対してここで提出される不信から，次のことが推論されうる。つまり，オリエントの迷宮——これは，ボルヘスによってそのように規定された世界の特徴なのであるが——は，なんら人間的なものではない。「……というのも，紛糾と奇蹟は，神に委ねられた行為……」であるのだから。